

## 地方会・研究会記録

### 第 60 回労働衛生史研究会\*

#### 関東地方の労働衛生史

##### 1. 関東地方会の歴史

櫻井治彦 ((財)産業医学振興財団)

関東地方会は、昭和 10 年の日本産業衛生協会第 8 回総会で地方会設置が決定されたことを受け、昭和 12 年 2 月から活動を始めた。地方会の主な事業である定期的な会合の開催は、関東地方会集談会という名称で昭和 22 年から始められた。その後第 65 回 (昭和 40 年 1 月) から関東産業医学会、第 93 回 (昭和 47 年 5 月) から関東地方会例会と名称変更して最近の第 252 回 (平成 23 年 2 月) に至っている。第 7 回 (昭和 24 年 7 月) 以降の記録は、産業衛生学雑誌、50 周年記念誌、産衛 70 年史などに残されている。関東地方会例会が半世紀以上にわたって毎年 4 回ずつ定期的、継続的に行われてきたことは、関東地域における産業衛生の展開にとって非常に有意義な業績であったと考えられる。関東地方における労働衛生関連の活動は、大学、研究機関、先進的な企業等に所属する人材が豊富であることによって支えられてきた。地方会という切り口を離れて、明治以降における関東地方からの重要な発信をたどると、明治 34 年 11 月に刊行された、労働衛生学に関する我が国最初の図書「工業衛生学」が、東京の一開業医であった窪川忠吉によって著されたことは興味ある事実である。その前後の事情を明らかにすることは価値があると考え、その一端についても報告した。

##### 2. 足尾銅山の歴史

相澤好治 (北里大学医学部衛生学)

栃木県の足尾銅山は 1610 年に農民により発見され、徳川幕府直轄の鉱山として栄えたが、幕末に産出量が減少し、明治になり 1877 年 (明治 18 年) 古河市兵衛がその経営に携わった。新しい鉱脈が発見され、新しい鉱山機械設備の導入により地下深部で採鉱し、運搬にトロッコ軌道を設置、機械選鉱、発電機を導入するなど先進的

な技術を導入し、明治末期には国内最大の銅山となった。

一方、足尾におけるエネルギー源として薪炭が使用されたため近隣の森林は枯渇し、精錬亜硫酸ガスの発散により木材再生力が衰えた。そのため渡良瀬川下流域で氾濫しやすくなり、河川水の汚濁で漁業と農業に悪影響を与えた。「足尾鉱毒事件」として社会問題となり、足尾銅山は日本の公害の原点といわれている。

また、鉱夫には他の鉱山でみられた「よろけ」などの珪肺が発生しており、1946 年 (昭和 21 年) に足尾銅山労働組合が中心となった鉱山復興町民大会で珪肺対策を要求する戦後の第一声となり、労働衛生行政の取組が行われる契機となった。栃木県塩谷郡 (現日光市) に 1949 年設立された国立珪肺療養所「清流荘」は後に珪肺労災病院となった。

足尾銅山は 1973 年に閉山されたが、以上のように日本のじん肺対策推進にも大きな貢献をしたと考えられる。

##### 3. 6 価クロム問題の経過

石井義脩 ((財)産業医学振興財団)

1972 (昭 47) に日本電工 (株) 栗山工場 (北海道) におけるクロム障害が顕在化しているが、6 価クロム問題として大きな社会問題となったのは、1975 年 (昭 50) 夏以降の日本化学工業 (株) 小松川工場 (東京) のクロム障害に係る問題である。

旧労働省は、前者の栗山工場の労働者について疫学調査の委託、労災補償を行った。後者の小松川工場の問題に際しては、当時、次々に顕在化してきた種々の職業がんなどに対応するため、労働衛生行政・労災補償行政とも種々の対策を講じた。

1977 年 (昭 52) に労働安全衛生法が改正され、有害性調査が制度化された。

クロム障害に関する専門家会議による検討は 1975 年 (昭 50) 9 月から始められ、翌年 1 月に中間報告がなされたが、さらに翌 1977 年 (昭 52) 再開後は時間がかかり、小松川工場の疫学調査の同会議への報告や、クロム被害者の陳情における行政の約束の履行などを経て 1984 年 (昭 59) に最終報告がなされ、同年に告示による業務上疾病の追加や認定基準の改正などがなされた。

\*日 時：平成 23 年 5 月 18 日 (水)  
会 場：ニューピアホール (東京都)  
世話人：石井義脩 ((財)産業医学振興財団)